

アタッチメントの枢要な役割を再確認する —乳児院調査の結果にも拠りながら—

遠藤 利彦

東京大学大学院教育学研究科

アタッチメント理論の創始者たるJohn Bowlbyによれば、アタッチメントとは文字通り、生物個体が他の個体にくっつくようにする(アタッチしようとする)ことに他ならない。Bowlbyは、個体がある危機的状況に接し、あるいはまた、そうした危機を予知し、恐れや不安の感情が強く喚起された時に、特定の他個体への近接を通して、主観的な安全の感覚を回復・維持しようとする行動傾向をアタッチメントと呼んだのである。

このアタッチメントに関わるこれまでの膨大な研究の蓄積は、とりわけ乳幼児期におけるアタッチメント経験の質が、その後の人の生涯に亘る心身の多様な側面の発達に深く関与し得ることを実証してきている。幼い子どもは、養育者等との緊密な関係性によってもたらされる安全の感覚に支えられて、外界への探索活動や学習活動を安定して行い、また相対的に円滑な対人関係を構築することが可能になるのだと考えられる。Bowlbyは、養育者は、小さな子どもにとって「安心の基地」(secure base)および「安全な避難所」(safe haven)として在るべきだと言明していた。子どもは特に感情の崩れがなく落ち着いている時には、養育者を「安心の基地」として、それを拠点に活動の範囲を広げ、いろいろなことにチャレンジしながら思い切り遊び、探索や冒険に没頭することができる。しかし、その探索や冒険の最中に、遊び疲れや、痛い思いをしたりして、恐れや不安といったネガティブな感情が生じると、子どもは、今度は、あそこに行けば必ず慰めてもらえるはずの養育者という「安全な避難所」に猛スピードで駆け込もうとするのである。そして、そこで養育者にしっかりとくっつき安心感を取り戻し、感情の燃料補給を済ませると、再び養育者を「安心な基地」として勇敢に外界へと出て行こうとする。小さな子どもの日常は、まさにこうしたことの繰り返しだと言えよう。ある研究者らは、こうした繰り返しのあり様を「安心感の輪」(circle of security)と呼び、子育てや保育などの基本は特に難しいことではなく、この「安心感の輪」をごく自然に子どもに経験させてあげることなのだとしている。

実のところ、アタッチメント理論が最も重視するのは、何かあった際には確実につながることができるという主観的確信が、高度な自律性の獲得を可能ならしめるということである。そこには、一つの逆説があり、幼少期に恐くて不安な時に安定してくっつくことができ、その度ごとにしっかりと安心感に浸ることができていた子どもほど、何かあったらあそこに向けて信号を発すれば、あるいは駆け込んでいけば、必ず慰撫され・保護してもらえるはずだという確かな見通しを持つことができるようになる分だけ、徐々に他者に過度にくっつくことなく、すなわちあまり甘えたり依存したりすることなく、逆にしっかりと一人でいられるようになるのである。しかし、言うまでもないが、すべての子どもが幼少期に、こうしたある意味、当たり前とも言えるアタッチメントを安定して経験できる訳ではない。とりわけ、虐待やネグレクトといった不適切な養育に日々、さらされている子どもは、養育者とのアタッチメントに重篤な問題を抱え込み、時にそれに起因して、心身発達の様々な側面に看過しがたい遅れや歪みを呈してしまうことがある。

この講演では、アタッチメントとは何か、なぜ重要かということを再確認した上で、それがいかなる機序で子どもの心身発達に深く関与し得るかを概括し、かつ、乳児院で生活する子どもに関して実際に行った調査結果にも基づきながら、最初期におけるアタッチメントの形成不全がもたらす由々しき問題、と同時に、それに対する有効な介入のあり方およびそれを通じた回復可能性などに関して、試論したいと考える。